

今年の夏、市内中学生・高校生20人が、友好親善訪問団として姉妹都市ベルギー王国ワテルロー市で5泊6日のホームステイを経験し、平成30年9月24日に、その経験を発表する帰国報告会が市役所で行われました。

その翌日、市長と政策秘書課職員とで、「長久手らしさ」について意見交換する機会があり、その一部を紹介します。

## 日常生活に、その土地らしさがある

私も、5年前の秋、ワテルロー市を訪問しました。ワテルロー市の街路樹は、落葉樹が多く、住宅地の歩道は、落ち葉で埋もれていて、落ち葉がゴミではなく、落ち葉でいられる場所でした。今回、訪問団が出発する際に、私から子ども達にこの落ち葉の話をしたところ、帰国報告会の際、一言ずつ、落ち葉についての感想を付け加えてくれました。



ワテルロー市の秋の風景

その他にも、ホストファミリーとの思い出として、手料理をふるまってくれたこと、夜遅くまで語り合ったこと、家の近くの公園に行って遊んだこと、自分達もお礼として日本食をホストファミリーにふるったことなどを発表してくれました。多くの子ども達が、ワテルロー市の風景やホストファミリーとの日常生活の中で発見や喜びを覚えたようです。

私たち日本人は、お金を支払うことで得られる楽しみや、おもてなしに慣れてしまっていて、近くの公園で遠方からの来客との時間を楽しむという経験をあまりしたことがありません。だからこそ、子ども達には新鮮に映ったのかもしれませんが。

次は、私たちがワテルロー市の青少年を迎える番です。私たちは、彼らをどのようにもてなすでしょうか。日本文化を知ってもらうため、京都や高山に連れて行くのでしょうか。夕食は、回転寿司に連れて行くのでしょうか。

その土地らしさは、風景やそこに暮らす人達から醸し出されるものです。遠くの観光地に行かなくても、長久手には、香流川の流れや今の季節なら稲穂が黄金色にたなびく様子など素晴らしい風景があります。素晴らしい人達が暮らしています。そうした日常生活が、「長久手らしさ」だと私は思います。京都に行って、抹茶と和菓子を食べるよりも、おこしものや鬼まんじゅうを作って食べることの方が、長久手を知ってもらおうことだと思います。

子ども達にとって今回の経験は、家族や地域との関係、公園や落ち葉といった日常にある身近な風景を見つめ直す良いきっかけになったと思います。ワーテルロー市との友好事業は、長久手に暮らす私たちが、長久手を見つめ直す絶好のチャンスでもあるのです。

～市長の話を聞いて～

個人で旅行をして、ワーテルロー市民のお宅に泊めていただいたことがあります。そのとき、彼らは、何度も何度も行っているであろうワーテルローの戦いを紹介する博物館に連れて行ってくれ、一緒に長い時間をかけて見学してくれました。そして、帰宅後には、キャンドルに火をつけ、食前酒を楽しみ、その後に夕食の準備を始めて…と、ワーテルロー市民の日常生活を垣間見ることができました。私は生活スタイルの違いを感じ、ワーテルローの良さ、日本・長久手の良さをそれぞれ感じることができました。

私の中で「おもてなし」は、豪華な食事や観光地に連れて行くという発想でした。しかし、「特別」ではなく「日常」を知ることができることが、姉妹都市の交流だからこそだと思いました。